

No.100 陰里 寿郎 —無題—

Juro Kagesato

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 11 月 1 日付 立川市市報記事より

陰里寿郎は、鏡をとり込んだ車止めを作った。彼の作品には鏡がよく登場するが、鏡は「見る
こと-見られること」を問う装置でもある。作品を見る者は、自分自身を見つめることになる。
ただ鏡に映った世界は、実際の世界の反対なわけで、自分自身を確認しようと鏡をのぞいても、
それは他者の目に映る自分とはやはり異なるのだ、と作家は言っている。

肩から上の人型が裏表にあるこの作品は、ここを歩いて通る人達に、都会の忙しさのなかでち
よっとたたずんで自分の顔を見るのもほっとしていいでしょう、と言うかのようにたたずんで
いる。車道に面している部分はちょうど車のサイドミラーの位置に当たり、違法駐車した人は
自分の顔が見えるそうだ。ユーモアにあふれた作品である。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

今、目の前に見えているものは本当に見えているのでしょうか？ 街の片隅にも目を向けるべ
き真実があると思います。

だけど青い空を見上げると、とても気持ちが良いのも真実だと思います。

鏡を見るのは自分自身を確認しているのでしょうか、他人に映る自分を見ているのでしょ
うか？

でも、それはすべて逆さだと思います。元気の振りをしながら実は悩んでいたり、知らないの
に知っている振りをしてしまうことがあります。

重ねた時間とその軌跡、放射するエネルギー、それが人の魅力につながると思います。

本当に見えているのだろうか、それとも知識として情報として知っていることをただ眺めてい
るのだろうか？

TVで見る湾岸戦争やコンビニ強盗と店主の銃撃戦の映像より、子供のころ自分の手でちぎった
ザリガニの腹、皮を剥いだカエルの方が、やはり今でもどこかリアルです。

今日一日の中で何かを見て体感して生に実感する事より、溢れる情報の中から何か選び、見た
つもり知ったつもりになることに忙しい。

ぐったりと疲れることが生の体感なのか？

その体でぼんやりとみるTVに流れる衝撃的な映像は自分にとって何なのか。

その想像力も湧かない位に疲れた心にどう焼き付くのか？

自分の見ているものは何なのか？

鏡に映る自分はいつも自分を見ている。今日も元気かい？

よく見ることを「なめるように見る」という。

おなかが痛いときは手を腹に当てる。だから「手当て」。

好きな人にキスをする。ドキドキするし、そして安心する。

気圧の谷や寒冷前線とかが通過すると、体調が変化する。

今日は体操して、水を飲んで、空を見よう。